

ある北方教師

柏崎 栄 著



ある北方教師

柏崎 栄 著

労働旬報社

著 者 略 歴

- 1906年 岩手県気仙郡吉浜村に生まれる。
1927年 岩手県師範学校二部卒業，岩手県下の小中学校を歴任，その間1940年，生活綴方事件で検挙される。
1965年 退職。
現住所 岩手県気仙郡三陸町吉浜字中井 6 の 1

ある北方教師

検印省略

昭和46年 2月15日 第二版

定価 420円

著 者 柏 崎 栄

発行者 木 檜 哲 夫

発行所 労働旬報社

東京都港区芝西久保巴町32

電話 (434) 3681—5

振替 東京 180374

装 幀 天 造 直 子

印 刷 東銀座印刷KK

まえがき

第一次世界戦争後の世界恐慌が、日本にも波及して、金融恐慌をひきおこした一九二七年、私は教員生活に入った。

恐慌と凶作で疲弊した農村、その上を吹き通す戦争の嵐。日増しに厳しさを加えてゆく天皇制ファシズムにおびえながらも、子どもと教育を守ろうとした、若き教師の一人だった。

子どもを一人の人間として尊重し、子どもの現実在即して、具体的生活的に教育をすすめることは、天皇を神とし、醜の御楯として己の生命を捨てることを柱とする、抽象的觀念的な戦前の教育とは、対立せざるを得ないものだった。

日中戦争を押し進め、さらに太平洋戦争に突入するための地ならしとして、国内の民主主義、平和主義勢力を鎮圧しておく必要があったのだ。一九四〇年、進歩的な教師集団であった生活綴方教師集団も弾圧された。

天皇制軍国主義の教育は、侵略戦争を聖戦であるとし、教え子を戦場に送り出した。その結果はどうであったかは、戦争の惨禍を身をもって経験した国民には書くまでもないことである。

教科書検定で、戦争の惨禍を書かせないようにしたり、侵略戦争の本質を覆いかくそうとするような傾向にあるとするならば、平和処理、という口実で、自衛官の海外派遣も、合憲、

であるという拡大解釈を、政府官僚が明らかにしたという、今日の事態と照らし合わせて、日本は再び、東洋平和のため、などと称して、アジアへの軍事的進出を図るのではないかの危惧をいだくのも他国の人ばかりではないだろう。

もし支配権力にそうした意図があるならば、再び上からの権力による国家統制が厳しさを加えてくるだろう。教員の管理体制の強化もその一環をなすものではないだろうかと思われる。

人間が月に降り立つほどの知恵を見せているが、この地球から戦争をなくすほどには、人類の理性はまだ発達していないのだろうか。一步退つて考えてみると、子どもを一人の人間として尊重し、そのしあわせのために、その能力の全面開発をねがい、その開発がそのまま国益にもつながり、個人と国家の利害が密着しているような体制の下にある場合は、生命をかけても守らなければならないという愛国の熱情も生まれてくるだろうし、国の教育がその方向に向かうことも、一応肯定できよう。

しかし、国がそのような状態ではないときは、時の支配階級の利益のために、教育は歪められてくると思われる。選別差別的教育傾向はそれではないのか。そうしていろいろの面から不合理な制約が加えられ、教員の自主的創造的な営為も困難となり、教師は無気力なその日ぐらしの生活に追いつまれ、誠実な教師には生きにくい時代となってくるのではないだろうか。

私は当時、子どもをよくするための環境づくりのために、地域に出ていった教育活動は、泥沼に注ぐさやかな清水のようなもので、空しい努力ではないかと思つたが、いまは教員組合

という大河もでき、民主主義勢力も比較にならないほど増大している。戦争に向かう勢力に対しても戦える力を持っている。

天皇制ファシズムの嵐の中で、一人の教師の貧しい実践が、現代を生きようとする若い良心的教師のために、なんらかの力になるならば幸である。

一九七〇年 春分の日に

柏崎 栄

目次

まえがき……………一

第一章 暗い谷間の記録

一 貧しき村々……………一〇

1 山峡の学校……………一〇

2 山百合の花……………一四

3 織田秀雄とのであい……………一六

二 豊作饑饉……………一九

三 しのびよる軍靴の足音……………二四

1 凶作と軍用臨時列車……………二四

2 自由主義的教育……………二九

四 磯浜の子ら——生活台に立った教育実践……………三二

五	三陸津波……………	三〇
六	日蔭の村の綴方……………	三六
七	凶作地帯……………	三七
	1 一銭の悲しみと欠食児童(三七)	
	2 兎の飼育と共同精神(三七)	
八	「生産と教育」についての論争……………	六四
第二章 一枚の落葉		
一	皇国精神の育成——六原青年道場……………	一〇四
二	自主的な「講習会」……………	一〇六
三	力尽くして……………	一〇九
	1 教科は肥料(一〇九)	
	2 脚本「村の子ら」(一一一)	
	3 「風の中の子供」と坪田譲治(一一一)	
	4 孤独に堪えて(一二九)	
	5 一枚の落葉(一二五)	
四	卒業後の交流……………	一五〇

1 別れ(一五〇)

2 卒業後の交流(一五四)

3 模範工(一六四)

五 旗を巻く……………(一六六)

1 綴方グループの仲間たち(一六六)

2 沢瀉の花——鈴木道太と共に(一七二)

六 第一回教育科学研究会……………(一七五)

第三章 生活綴方事件

一 暗い谷間の子どもたちと教師……………(一八三)

1 生活綴方教師の拡がり(一八二)

2 生活の中の子どもの眼(一八四)

二 冬の朝の検挙……………(一八七)

三 妻の手紙……………(一九〇)

四 留置場の記録……………(一九七)

1 昏れる山脈(一九七)

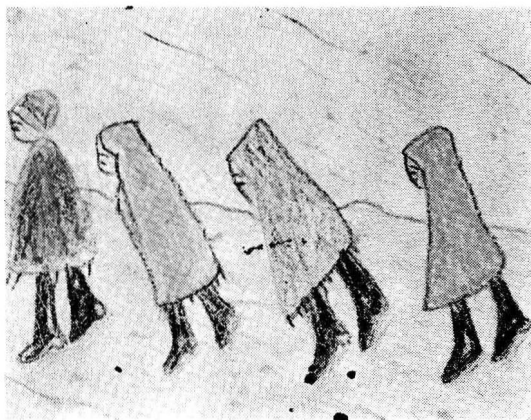
2 黄金の月(一九九)

目 次

3	ミズアメ売りの少女 (二〇〇)	
4	読書のよろこび (二〇二)	
5	訓育 (二〇三)	
6	鉄かぶと (二〇三)	
7	価値判断 (二〇四)	
8	留置場の歌 (二〇六)	
五	調 書	二〇七
六	特高課長	二一二
七	釈放——あいさつまわり	二一四
八	母	二一五
九	戦争の渦中での苦悶	二一六
十	青い空	二一九
	あとがき	二三三

第一章

暗い谷間の記録



一 貧しき村々

1 山峽の学校

白雲の種山ヶ原に燃ゆる火の
けむりにゆらぐ

さびしき草穂

白雲にすがれて立てる鬼あざみより

種山ヶ原に

かなしみは湧く

宮沢賢治が歌った北上山脈種山高原の麓に、坂上田村麿の部将が、蝦夷の首領人首丸ひとくべまるをこの地に退治したことから、地名が生まれたという人首ひとくべがある。

教会堂の鐘が朝夕高くひびき渡る山峽の小さな町。人首小学校は八学級で職員は一〇名。一

九二七年（昭和二年）岩手県師範学校を卒業と同時に短期現役兵として入隊し、第八師団弘前歩兵第三一連隊を、八月三十一日除隊し、九月から赴任した私には、高等科二年级三教員制だったので、学級の担任がない。教案を書き終えたと、教会堂の夕べの鐘が街の家並の上を鳴り渡るまで、広い校庭をひとり走りまわった。

日清日露の両戦役を経て発達した日本資本主義は、そのまま軍国主義の途を行くであろう。一九二五年（大正一四年）旧制中学校、師範学校、高等学校、大学に現役将校を配属し、教練は正科として教えられた。短期現役兵の制度は師範学校卒業生だけの制度で、天皇制軍国主義教育の第一線の担い手として、五ヶ月間訓練されるのである。私はトルストイなどの人道主義にもふれていたもので、人殺しの練習だとして本気になれず、除隊の日を待ちわびる日々だったが、いまこうして校庭を跳びまわることは、籠から放たれた鳥のように自由な気分だった。

卒業生の誰彼のように、私も文検（旧制中学校、師範学校、高等女学校教員免許状取得試験）を受けようと思った。必ずしも中等学校教員にならなくてもよろしい。自分の勉強の目標を定めなかったし、文検を取っていることは当時の小学校教員の誇りでもあったから。

科目として「教育」を考えていたが、教育は人間形成の問題であり、如何なる人間に形成するかを考えると、その底に道徳があるのではあるまいかと思ったので、「倫理」と決めて参考書を買っていった。

私が吉田静致『倫理学演義』などをくり返し読んでいるころ、国内は第一次世界大戦後の金融恐慌の嵐の中にあり、当時東大生だったプロレタリア作家中野重治を、自宅に呼んで話をき

いたという芥川竜之介は、「食色にも倦いた。前途には僕の将来に対するぼんやりした不安がある」と「或旧友へ送る手記」の中に書いて自殺した。河上肇の「第二貧亡物語」が『改造』に連載され、共産党大檢舉の三・一五事件があり、郷里に近い村のあわびの採捕をめぐる争議を書いた、片岡鉄兵の「綾里村快挙録」が『改造』に載ったりして、暗いかげりとともに、時代の推移を思わせる様相が漂っていた。

ある日の放課後職員室の炉辺で、主席のK先生と私との間に小さな論争があった。先生は盛岡市願教寺の学僧島津大等師に私淑し、たびたび法話を聞きに上盛されるほどの、熱心な浄土真宗の信者であり、師の著『思想と信仰』が机上に置かれてあったりした。先生は三二、三歳の若き首席訓導だった。

そのときの先生との論争は、ひとりひとりの人間がよくならないければ、社会はよくならない、と先生のいわれるのに対して私は、ひとりひとりの人間は、社会がよくならないければよくならない、といったの論争だった。

まじめな先生であるから、まず自己の完成を問題とされたのであったろう。私は自己の完成のみを問題として、社会に目を向けなければ社会はよくならないし、社会がよくならないければ、ひとりひとりの人間もよくならないといひ、先生の個人に重点をおく考え方に對し、社会に重点をおく考え方に立ってのものだった。思えば先生の何の不思議もない当然の話に、敢て異を立てた感のある私の話だった。

学の浅い若僧の不遜なことはがさわられたのか、先生は、私の信仰が悪いというのかと声を荒らげられた。私は内心先生の信仰に畏敬し、羨望さえおぼえていたので困ってしまった。後日先生は、議論がはげしくなればなるほど、微笑さえ浮かべて語るので、馬鹿にされてるような気がしたと述懐されたが、私には先生を侮るような気持はすこしもなかった。『貧乏物語』などを読み、引用されている「恒産なければ恒心なし」とか「衣食足って礼節を知る」などのことをそのとおりに思い、経済を改善しなければ道徳は進まない、そのような立場から語ったのだった。

翌朝、出勤して来られた先生は、自分の机に風呂敷包をおかれると、私の机の前に歩み寄られ、きのうは年甲斐もなく興奮して済まなかったと詫びられた。私はまったく恐縮し、昨日の広言を恥じ入るとともに、無礼な若者に対し、頭を下げて詫びられる先生の真摯な人格に益々尊敬の念を深くするのだった。

その後のある夜、同僚と先生の下宿を訪ねた。先生はノートに書かれた短歌を見せてくれた。読んでいったら、

議論して 夕帰れば わが宿の

庭の木がくれに 百日紅の花

という一首が出てきた。私は再び慚愧の思いを深くしノートを置いた。

紀元節挙式の際、校長が白手袋でなく、灰色の手袋をして教育勅語を奉読し、来賓の中にその不敬をあげつらうものがあつたが、その際K首席は校長を宿直に招じ上座に着け、自分は下

座に膝を正し、白色の手袋にて奉読すべきものである旨を忠告申しあげた。校長に対し、おこがましくも忠告申しあげることになったと恐縮するという態度であつたというが、謹厳そのものの先生であつた。

2 山百合の花

人首川の土手にすみれの花が咲き出ても、種山高原にはまだ雪が残っていた。

着ふるして汚れ破れた父のメリヤスシャツと、同じモモヒキだけをはいて、はじらいながら二階の廊下にもじもじしている、この異様な服装の児童を見て、授業に階段を上って行ったK先生も私も、ぎよつとして立ちどまり、顔を見合つた。

五年生の安夫は今日も遅刻して来たのだったが、この服装で教室に入つてゆくことをためらっているのだった。

安夫の父は腕のよい石工であつたがあまり働かず、働いて取つた金では酒を飲むのだった。母もしっかりしない人だったようで、安夫は朝寝をし、顔を洗わないで登校することが多かった。家では食うや食わずの日々であつたらしい。安夫は学用品を持って来なかつたり、母が日雇いに行く日には、子守をいつかつて欠席するのだった。当時は民生委員というようなものもなかった。けれども村の役場には扶助の係の人もあり、窮状は知っていたらしいが、何かの事情のためか、救助の手は届いてはいないようだった。図画の好きな安夫にクレヨンを与え、